

1. いまも心に残る先生の読み語り、そのときの 一冊が生涯の「伴侶」に (りぶりんと・中央区 山田源次)

『海をわたった折り鶴』 いかがでしたか。これから、おじいさんの子ども時代のお話をします。

1945年8月6日広島に、8月9日長崎に「原子爆弾」が投下されて20万人以上の人が亡くなりました。この本は「悲しい物語」ですが、平和を願う「祈り」が、遠くアメリカに1羽の「折り鶴」として渡って行ったお話です。

今年(2015年)は戦後70年と言われていますが、戦争を経験していない皆さんには、ピンとこないかと思えます。私が子ども時代を過ごした70年ほど前には、こんなことがありました。

ある日のこと、私の家の前に「爆弾」が落ちたのです。玄関に来ていたお客さんがビックリして、下駄のまま我が家の居間に駆け込み、私も怖くなって押し入れに飛び込みました。窓ガラスは全部壊れ、隣家には、大きな石が天井を突き破って落ちて来ました。隣町にも「爆弾」が落ち、片腕が無くなる大けがをした人もいたそうです。

戦況が厳しくなり、私が東京の親元を離れて埼玉県の深谷市に疎開していた時のことです。母親と兄が「どら焼き」を一つ持つて、疎開先に見舞いに来てくれました。仲間に分けられないので、一人トイレにももって食べました。何とも「苦く」て「甘い」複雑な味がしたものです。

私の祖母は、東京本所(現・墨田区)でミルクホールという、牛乳などの飲み物と軽い食事が出来る飲食店を開いていました。東京大空襲の日です。辺り一面の火の海に、祖母は気が動転して、バケツで水を頭に被

り、火の中へと消えていきました。子どもたちが「おかあちゃん」といくら呼び止めても戻って来なかったそうです。

やがて終戦を迎え、学校が再開しました。友達に再び会うことはできませんでしたが、満足に教科書やノートも揃いませんでした。遠足の日のことです。履いて行く履物がありません。母親に勧められたのは、大人用のズック。穴の開いたぼろぼろのスニーカーです。恥ずかしくてべそをかきながら、少し遅刻して参加しました。

学校で楽しかったのは、何と言っても先生がお昼休みにくたさる「読み語り」でした。千一夜物語の「シンドバッドの冒険」「アラジンと魔法のランプ」「アリババと40人の盗賊」などを、わくわくしながら聞いていました。

もう一つ忘れられない作品があります。『ビルマの堅琴』(たこ)です。戦時下のビルマ(現ミャンマー)が舞台となった児童向けの作品で、水島上等兵という堅琴の演奏が得意な兵士が主人公です。彼は、悲惨な戦場での体験から、僧侶となります。終戦となり、水島が所属していた隊が帰国する日、隊員達は彼と再会し、帰国を促します。しかし彼は「仰げば尊し」という別れの歌を堅琴で奏で、ビルマに留まり、戦争の犠牲者を弔い続けることを選ぶのです。先生の「読み語り」のお陰で、この1冊は私が戦争を語る上で、外すことができない1冊となり

ました。

こうした「読み語り」の体験と記憶が、シニアの読み聞かせボランティア「りぶりんと・中央区」に入会・活動する動機になりました。1冊でもいいのです。どうか皆さんも生涯の「伴侶」としての「1冊」(もちろん、何冊でもよいです)を見つけて下さい。



『海をわたった折り鶴』

石倉欣二/作 小峰書店

《原爆の子の像》モデル佐々木禎子さんが折り鶴に込めた祈りは、半世紀を経て米ニューヨーク同時多発テロの犠牲者にとどいた!! サダコの短くも懸命に生きた生涯と、その後の思いがけない広がりを描く。(出版社HPより)

- 発行日: 2010年7月17日
- ページ数: 31ページ
- ISBN: 978-4-338-18038-2



児童も、絵本の世界に自然と引き込まれる
(中央で絵本を広げているのが筆者)

りぶりんと・中央区(東京都)

〈問い合わせ先〉

中央区日本橋堀留町2-7-2-1011
TEL: 03-3664-8687 小林典子

